

女性の醜形恐怖心性尺度の作成

大村美菜子*¹・小島弥生*²・中田洋二郎*³・沢宮容子*⁴

Development of Dysmorphobia Tendency Scale in Female Youth

Minako OHMURA*¹, Yayoi KOJIMA*², Yojiro NAKATA*³, and Yoko SAWAMIYA*⁴

In this study, we define dysmorphobia tendency as “The tendency toward a strong obsession with the appearance of self, which is a strong interest toward appearance in the whole body or in the parts of the body”. In study 1, we have developed the dysmorphobia tendency scale in female youth. Subjects were 439 female undergraduates. Factor analysis identified two factors: “evaluation apprehension of appearance”, “obsessive concentration on appearance.” In study 2, we have evaluated the reliability and validity of the dysmorphobia tendency scale. The dysmorphobia tendency scale had good test-retest reliability. In addition, there were significant correlation and discrimination between dysmorphobia tendency scale and other related questionnaires.

key words: dysmorphobia, obsessions, reliability, validity

問題と目的

人が自らの容姿に何らかのこだわりをもつことは日常的なことである。Rhode (2010, 栗原訳 2012) は、外見や容姿がよくないことは人にとって重要な問題であり、容姿の問題が自尊感情を傷つけることは人生のさまざまな局面において起こり得ることを指摘している。また、客観的に見れば容姿に何の問題のない人でも、容姿について思い悩んでいる人も存在する。特に、若い世代において、その傾向は顕著である。内閣府が実施した第8回世界青年意識調査(内閣府政策統括官, 2009)によると、18歳か

ら24歳までの日本人男女青年の抱える悩みや心配ごとのうち、容姿についての悩みの占める割合が、2003年には6.3%であったのに対し、2008年には11.1%にまで増加している。また、男女別に見ると、容姿についての悩みが男性は7.2%であるのに対し、女性は14.9%と割合が高い。

一方、臨床心理学および精神医学においては醜形恐怖症という病態が注目を集めている。鍋田(2004)によれば、醜形恐怖症とは、客観的にはそれほど、あるいはまったく醜くないと思われる容姿について、“異様に醜い”と悩む病態である。醜形恐怖症はDSM-IV-TR(APA, 2000 高橋・大野・染矢監訳

*¹ 立正大学大学院心理学研究科

Graduate School of Psychology, Rissho University, 1-3-3-103 Okamoto, Setagaya-ku, Tokyo 157-0076, Japan
e-mail: popyblancpoponoir@gmail.com

*² 埼玉学園大学人間学部人間文化学科

Department of Human Culture, Faculty of Human, Saitama Gakuen University, 1510 Kizoro, Kawaguchi-shi, Saitama 333-0831, Japan

*³ 立正大学心理学部臨床心理学科

Department of Psychology, Faculty of Psychology, Rissho University, 4-2-16 Osaki, Shinagawa-ku, Tokyo 141-0032, Japan

*⁴ 筑波大学人間系

Faculty of Human Sciences University of Tsukuba, 1-1-1 Tennoudai, Tsukuba-shi, Ibaraki 305-0006, Japan

2003) においては身体表現性障害の1つである身体醜形障害¹⁾に位置づけられており、一般人口での発生頻度は0.7~2.3%であるとされている (Carroll, Schahill, & Phillips, 2002; 筒井, 2003)。

そこで本研究では、健常者における容姿に対する強いこだわりを醜形恐怖心性²⁾と名づけ、醜形恐怖心性²⁾を測定する尺度の作成を試みる。本研究では、醜形恐怖心性を『自己の容姿に対する強いこだわりであり、容姿全体あるいは一部分に強い関心を向ける傾向』と定義する。ただし、醜形恐怖心性はあくまでも健常者における容姿に対する強いこだわりであり、それについて思い悩むことはあるものの、著しい苦痛は伴わないものとする。

醜形恐怖心性と類似の概念に対象化身体意識 (McKinley & Hyde, 1996; 田中, 2002) や身体醜形懸念 (Littleton, Axson, & Pury, 2005; 田中・有村・田山, 2011) がある。

対象化身体意識とは、「身体は他者から見られるものとして存在する」という身体経験に基づく自己の身体への意識 (McKinley & Hyde, 1996) を指す。この概念を測定する尺度として、対象化身体意識尺度 (田中, 2004) が開発されている。対象化身体意識尺度では、自分の容姿に関する意識を尋ねる項目もあるが、身体に関する他の事柄 (体重への不満、運動することへの意識、被服行動に関する意識、など) を測定する項目が多く含まれている。そのため、対象化身体意識尺度のみを用いて、容姿に対する強いこだわりである醜形恐怖心性²⁾を測定することは妥当とはいえない。

一方、身体醜形懸念という概念もある。これは「容姿についての欠陥への過剰な心配や強いとらわれ、過度の確認行動や容姿についての欠陥をカムフラージュするための行動、社会的な場面からの回避や安全を求める行動」 (Littleton et al., 2005) と定義される概念である。この概念を測定する尺度として、日本語版 Body Image Concern Inventory (以下、J-BICI と略す; 田中他, 2011) が開発されている。身体醜形懸念の定義には認知的側面と行動的側面が含まれている。そのため、J-BICI の尺度項目にも、容姿の

欠陥に対する心配やとらわれといった醜形恐怖心性²⁾と類似の側面を尋ねる内容とともに、過度の確認行動や社会的場面からの回避行動といった醜形恐怖心性とは異なる側面を尋ねる内容もある。さらに、J-BICI は抑うつや強迫傾向を測定する尺度との間に正の相関を示すことが明らかにされている (田中他, 2011)。これらのことから、J-BICI は健常者における容姿に対する強いこだわりを測定する尺度としては適切ではないと考えられる。

このように現在のところ類似の概念を測定する尺度は存在するものの、醜形恐怖心性²⁾を測定するにふさわしい尺度は存在しない。また、青年期の女性は急激な身体発達と性的成熟により危機状態にある (無藤, 2000; 伊藤, 2001) ことや、健常者における醜形恐怖傾向が男性よりも女性に顕著である (Phillips, Menard, & Fay, 2006) ことから、醜形恐怖心性を示す人々は、青年期の女性に多いことが予測される。そこで、本研究では女性の醜形恐怖心性²⁾を測定する尺度を新たに作成し、信頼性・妥当性も併せて検討することを目的とする。

研究 1

目的

研究1では、健常者における容姿に対する強いこだわりを醜形恐怖心性²⁾と名づけ、醜形恐怖心性²⁾を測定する尺度の作成を試みる。

方法

調査対象者および調査時期 調査は3回に分けて実施した。第1回調査は、2006年9~11月に東京都内にある計2カ所の大学において、女子学生256名 (平均年齢20.22歳, $SD=3.19$) を対象に調査を行った。第2回調査は、2011年12月中旬に東京都内と埼玉県内の計2カ所の大学において、女子学生75名 (平均年齢19.43歳, $SD=1.28$) を対象に、調査を行った。第3回調査は、2012年1月中旬に東京都内にある計5カ所の大学において、女子学生193名 (平均年齢20.24歳, $SD=1.76$) を対象に、調査を行った。

手続き すべての調査において、講義時間の一部を借りて質問紙を配布し、その場で回答を求め、回答後に一斉回収した。回答時間はいずれも約15分であった。質問紙を回収した後、研究計画書を配布

¹⁾ 先行研究には、同じ内容について身体醜形障害と表現しているものと醜形恐怖症と表現しているものがある。そこで本論文ではすべて醜形恐怖症という用語で統一して述べる。

Table 1 各項目の記述統計量

	平均値	SD
1. 私は自分の容姿についてはめったに考えない	1.78	0.87
2. 人は、生まれ持った自分の容姿にとらわれるものだと思う	3.65	0.92
3. 自分が他人にどう見られているのかほとんど気にならない	1.71	0.85
4. 端正な容姿に見えるよう努力しなかったとき、自分のことを恥ずかしいと思う	3.47	1.01
5. 自分の外見よりは内面のことをよく考える	3.31	0.91
6. 努力さえすれば、人は自分のなりたい容姿になれると思う	3.28	1.15
7. 自分の外見を他人と比べることはめったにない	2.03	0.96
8. 自分の容姿を十分に管理することはできないと思う	2.83	1.05
9. 他人の目に映る自分の姿を何度も考える日がある	3.47	1.23
10. 容姿を整えるためできる限りの努力をしない自分はだめな人間だと思う	3.27	1.13
11. 容姿よりも体力があるかどうかに関心がある	2.41	1.11
12. 自分の容姿をより理想に近づけるために、容姿に気を使う	3.81	0.83
13. 人にあまり会わないことがわかっている日は容姿に気を使わない	4.08	1.06
14. 人から褒められたいから容姿に気を使う	3.25	1.17
15. 人にどう見られるかよりも自分のためにおしゃれをする	3.48	1.04
16. 異性からの目を意識するため、容姿が気になる	3.42	1.15
17. 外見的に魅力が高いほうが、人付き合いが上手にできると思う	3.70	1.16
18. 容姿に関して他者からどう言われようと自分が満足していればそれでいい	3.00	1.17
19. 人に嫌われたくないから容姿に気を使う	3.01	1.18

し、調査の目的について簡単に説明した。なお、第3回調査の参加者の一部(75名)は第2回調査の参加者と同じであった。これは再検査信頼性を算出するための手続きであり、研究2において詳述する。

調査内容 研究2に用いるための尺度を含め、質問紙は複数の尺度から構成されていた。研究1では、以下に示す19項目の質問項目を用いて、醜形恐怖心性尺度の作成を試みた。質問項目19項目のうち、11項目は田中(2004)の対象化身体意識尺度(全24項目)からのものであった²⁾。これに予備調査を経て独自に作成した8項目を加えて、尺度作成に用いた。回答は“非常にあてはまる(5)”から“全くあてはまらない(1)”までの5段階評定で求めた。

結果と考察

醜形恐怖心性尺度の作成 全3回の調査から計439名(平均年齢20.02歳, SD=1.19)を分析対象とした。439名の内訳は、第1回調査256名のうち回答に不備のなかった246名、第2回調査の75名、第3回調査のうち第2回調査には回答していない118名である。各項目の平均値と標準偏差をTable 1

に示した。

醜形恐怖心性尺度を作成するための質問項目である19項目を用いて主因子法・バリマックス回転で因子分析を行った(Table 2)。統計解析にはSPSS 19を用いた。共通性が.2以下である項目(10, 13, 18)や因子負荷量が.35以下である項目(2, 6)、さらに複数の因子に負荷量が高く因子的に曖昧な項目(3, 4, 7, 9, 15)を削除するという基準で因子分析を繰り返した。その結果、最終的に解釈可能な2因子にまとめることができた(Table 2)。第1因子に負荷量の高い項目は、「人に嫌われたくないから容姿に気を使う」、「人から褒められたいから容姿に気を使う」、「異性からの目を意識するため、容姿が気になる」、「外見的に魅力が高いほうが、人付き合いが上手にできると思う」、「容姿に関して他者からどう言われようと自分が満足していればそれでいい(反転)」であった。これらの項目から第1因子は、容姿に対して他者からの評価を懸念する因子と解釈され、「容姿に対する評価懸念」と命名された。第2因子に負荷量の高い項目は、「容姿よりも体力があるかどうかに関心がある(反転)」、「私は自分の容姿についてはめったに考えない(反転)」、「自分の容姿をより理想に近づけるために、容姿に気を使う」、「自分の外見よりは内面のことをよく考える(反転)」であった。これらの項目から第2因子は、他

²⁾ 対象化身体意識尺度(田中, 2004)の項目内容は、作成者の許諾を得て、項目を抜粋し、また一部の項目について内容の表現を変えた。

Table 2 醜形恐怖心性尺度の因子分析結果と α 係数

	容姿に対する 評価懸念	容姿に対する 関心集中	共通性	IT 相関
19. 人に嫌われたくないから容姿に気を使う	.72	.08	.53	.55**
14. 人から褒められたいから容姿に気を使う	.56	-.39	.46	.71**
16. 異性からの目を意識するため、容姿が気になる	.54	-.35	.41	.67**
17. 外見的に魅力が高いほうが、人付き合いが上手にできると思う	.47	-.15	.25	.57**
18. 容姿に関して他者からどう言われようと自分が満足していればそれでいい(※)	-.46	.22	.26	.60**
11. 容姿よりも体力があるかどうかに関心がある(※)	-.06	.54	.30	.49**
1. 私は自分の容姿についてはめったに考えない(※)	-.13	.54	.31	.50**
12. 自分の容姿をより理想に近づけるために、容姿に気を使う	.22	-.50	.30	.54**
5. 自分の外見よりは内面のことをよく考える(※)	-.15	.48	.25	.51**
固有値	1.65	1.41		
寄与率	18.33	15.68		
累積寄与率	18.33	34.00		
α	.72	.61		

下位尺度得点算出の際、※印の項目は評定値を反転させた。** $p < .01$

の何よりも容姿に対して関心を集中させる因子と解釈され、「容姿に対する関心集中」と命名された。

因子分析の結果を踏まえ、「容姿に対する評価懸念」の5項目の評定を単純集計した合計を容姿に対する評価懸念得点、「容姿に対する関心集中」の4項目の評定を単純集計した合計を容姿に対する関心集中得点とし、2つの得点の合計を醜形恐怖心性尺度得点とした。醜形恐怖心性尺度得点の平均値は30.68であった。なお、尺度を構成する9項目すべてにおいて、尺度の低得点群と高得点群の間に有意な評定値の差があり、IT相関の結果(Table 2)においても十分な値が得られたことから、質問項目の弁別性が確認された。

439名のデータを用いて α 係数を算出したところ、醜形恐怖心性尺度全9項目では $\alpha = .74$ 、下位尺度のうち「容姿に対する評価懸念」の5項目では $\alpha = .72$ 、「容姿に対する関心集中」の4項目では $\alpha = .61$ という値がそれぞれ得られた。

鍋田(2013)は、醜形恐怖症に見られる特徴として、自分の容姿を実際以上に醜いと認知すること、他者に自分の容姿を見られると想像する場合に他者に対する恐怖を感じることを挙げている。本研究で作成した醜形恐怖心性尺度は、醜形恐怖症とは異なり健常者における容姿に対する強いこだわりを測定するための尺度であり、他の何よりも容姿に関心を集中させる容姿に対するこだわり(容姿に対する関心集中)と、他者からの評価を懸念する容姿に対するこだわり(容姿に対する評価懸念)の下位因子が

得られた。それぞれの下位因子は醜形恐怖症に見られる特徴と類似する部分があり、健常者における容姿に対する強いこだわりを測定する尺度としての構成概念妥当性を示しているものと考えられる。

研究 2

目的

研究2では、研究1で作成した醜形恐怖心性尺度の信頼性と妥当性を検討することを目的とする。

妥当性については、醜形恐怖心性と類似の概念である身体醜形懸念との相関関係から収束的妥当性の検討を試みる。醜形恐怖心性尺度得点とJ-BICI(身体醜形懸念)得点との間には強い正の相関があることを予測する。

また、醜形恐怖心性と抑うつおよび強迫傾向との相関関係から弁別的妥当性の検討を試みる。田中他(2011)では、身体醜形懸念と抑うつおよび強迫傾向との間に中程度の相関があった。したがって、本研究でもJ-BICI得点とSDS(抑うつ)得点およびJ-PI32(強迫傾向)得点との間には、田中他(2011)と同様、中程度の正の相関があることを予測する。それに対し、研究1で作成した醜形恐怖心性尺度得点は、健常者の容姿に対する強いこだわりを測定している尺度であるため、SDS得点およびJ-PI32得点との間には相関はないと予測する。

さらに、醜形恐怖心性と対人恐怖心性との相関関係から併存的妥当性の検討を試みる。これまでの対人恐怖心性についての研究(堀井・小川, 1996)か

ら、対人恐怖心性は他者に見られていること自体が問題となり、他者の視線にさらされなければ容姿に対する関心も薄れる。それに対し、醜形恐怖心性は自らの容姿に関心が集中し、見られる対象としての容姿の良し悪しが問題となる。両者は似ている側面がある一方で異なる側面があると考えられる。したがって、醜形恐怖心性尺度と対人恐怖心性尺度との間には中程度の正の相関があることを予測する。

方法

調査対象者と調査時期 研究1に示した計3回の調査のうち、第2回調査(2011年12月実施)および第3回調査(2012年1月実施)の参加者が研究2の調査対象者であった。なお、第2回調査の75名は全員、第3回調査にも参加していた。第3回調査のみに参加した者は118名であった。

手続き 詳細は研究1に記した。なお、第2回調査と第3回調査の計2回の調査への参加を求めた75名については、匿名性を保持したうえで調査データを照合させる必要上、2回の調査ともに質問紙への回答の際に個人を識別できる6桁の番号の記入を求めた。

調査内容 調査に用いた質問紙には複数の内容が含まれていたが、そのうち研究2で分析に用いた内容を以下に示した。なお、第2回調査では、下記のうち①を含む質問紙に回答を求めた。第3回調査では、下記のすべての内容を含む質問紙(項目の提示順序は下記の番号順と同一)に回答を求めた。

①醜形恐怖心性尺度を作成するための質問項目

田中(2004)の対象化身体意識尺度24項目²⁾から11項目と、予備調査を経て独自に作成した8項目を新たに加えた計19項目。回答は“非常にあてはまる(5)”から“全くあてはまらない(1)”までの5段階評定で求めた。

②J-BICI(田中他, 2011)

19項目からなる尺度であり、作成者により再検査信頼性および構成概念妥当性が確認されている。先述したように、身体醜形懸念を測定するために開発された尺度であり、容姿の欠陥に関する認知的側面と行動的側面から項目が構成されている。“いつもそうだ(5)”から“まったくくない(1)”までの5段階評定で回答を求めた。

③自己評価式抑うつ性尺度(SDS)(福田・小林,

1973)

20項目からなる尺度であり、作成者により再検査信頼性、折半法、および併存的妥当性が確認されている、抑うつ度を測定する尺度である。“いつも(4)”から“めったにない(1)”までの4段階評定で回答を求めた。

④日本語短縮版Padua Inventory(J-PI32)(鈴木, 2004)

32項目からなる尺度であり、作成者により併存的妥当性、併存的妥当性、および因子的妥当性が確認されている。強迫傾向を測定するために開発された尺度であり、「必要以上に確認を繰り返す傾向がある」などの項目内容から構成されている。“非常にわずらわされる(4)”から“全くわずらわされない(0)”までの5段階評定で回答を求めた。

⑤対人恐怖心性尺度(堀井・小川, 1996)

30項目からなる尺度であり、作成者により再検査信頼性および因子的妥当性が確認されている。下位尺度が「自分や他人が気になる悩み」、「集団に溶け込めない悩み」、「社会的場面で当惑する悩み」、「目が気になる悩み」、「自分を統制できない悩み」、「生きることに疲れる悩み」の6つとなっている。“非常にあてはまる(6)”から“全くあてはまらない(0)”までの7段階評定で回答を求めた。

結果と考察

醜形恐怖心性尺度の信頼性・妥当性 再検査信頼性を調べるために、第2回調査と第3回調査の両方の回答に不備のなかった68名のデータを用いて2調査間の単相関を算出したところ、醜形恐怖心性尺度得点では $r=.91$ ($p<.01$)と強い相関が示された(下位尺度ごとの相関係数はTable 3に示した)。以上の結果から、本研究で作成した醜形恐怖心性尺度は、高い再検査信頼性を示しているといえる。2つの調査時点間には約1カ月の間隔があるが、この期間は年末年始を挟んでおり、分析対象である女子学生にとっては多くのイベントを経験していたと予測される。そのような時期であっても2時点間の尺度得点の相関が高かった。この結果から、容姿に強いこだわりをもつ人はイベントの有無に関わらずこだわりの強さを維持する傾向にあることが考えられる。

次に、醜形恐怖心性尺度の妥当性を調べるため

Table 3 再検査信頼性 (2 時点間の相関係数)

		第 3 回調査		
		醜形恐怖心性		
		全尺度	容姿に対する評価懸念	容姿に対する関心集中
第 2 回調査	醜形恐怖心性			
	全尺度	.91**	.81**	.73**
	容姿に対する評価懸念	.81**	.85**	.47**
	容姿に対する関心集中	.69**	.45**	.79**

** $p < .01$

Table 4 醜形恐怖心性尺度と 4 つの尺度との相関係数

	醜形恐怖心性尺度			J-BICI
	全尺度	容姿評価懸念	容姿関心集中	
1) SDS	.03	.09	-.07	.35**
2) J-PI32	.12	.16*	.01	.38**
3) 対人恐怖心性尺度				
全尺度	.17*	.21**	.03	.46**
自分や他人が気になる悩み	.39**	.43**	.18*	.56**
集団に溶け込めない悩み	.00	.03	-.04	.27**
社会的場面で当惑する悩み	.11	.15	.00	.29**
目が気になる悩み	.07	.11	-.01	.35**
自分を統制できない悩み	.12	.16*	.01	.39**
生きることに疲れる悩み	.15*	.19*	.03	.39**

** $p < .01$, * $p < .05$

に、第 3 回調査に回答した 193 名のうち回答に不備のなかった 176 名のデータを用いて、醜形恐怖心性尺度と 4 つの尺度 (J-BICI, SDS, J-PI32, 対人恐怖心性尺度) との単相関を調べた (Table 4)。

その結果、醜形恐怖心性尺度得点と J-BICI (身体醜形懸念) 得点との間には、予測したとおり、やや強い正の相関 ($r = .60$) が認められた。醜形恐怖心性尺度の下位尺度ごとに J-BICI 得点との相関係数を検討したところ、容姿に対する評価懸念得点との相関 ($r = .57$) の方が容姿に対する関心集中得点との相関 ($r = .40$) よりも相対的に強かった。容姿に対する評価懸念得点と J-BICI 得点との相関の大きさが、容姿に対する関心集中得点との相関よりも相対的に大きくなった点については、J-BICI と醜形恐怖心性尺度の違いを反映したためと考えられる。つまり、J-BICI には容姿に関する認知的側面の他に行動的側面 (社会的場面の回避傾向、等) も含まれており、他者から見られることを意識した行動が尺度得点に反映されている。この点が他者からの評価を気にする容姿へのこだわりの強さを反映した、容姿に対す

る評価懸念との相関を強めた可能性があるだろう。一方で、容姿に対する関心集中は、そのような行動的側面とは関連が低いと考えられるため、相対的に J-BICI との相関は弱くなったものと思われる。このことから、醜形恐怖心性尺度の収束的妥当性が示されたと考えられる。

一方で、J-BICI 得点と SDS (抑うつ) 得点および J-PI32 (強迫傾向) 得点との間にはそれぞれ中程度の正の相関 ($r = .35 \sim .38$) が認められた。前述のとおり、田中他 (2011) においても、身体醜形懸念と抑うつおよび強迫傾向との相関があり、本研究の結果と一致している。それに対し、醜形恐怖心性尺度得点と SDS 得点および J-PI32 得点との間は、無相関であった ($r = .03 \sim .12$)。このことから醜形恐怖心性尺度の弁別的妥当性が示されたと考えられる。つまり、醜形恐怖心性と身体醜形懸念は、容姿に対するこだわりという側面では類似しているが、醜形恐怖心性は抑うつや強迫傾向という側面を測定しておらず、その点で異なると考えられる。

さらに、醜形恐怖心性尺度得点と中程度の正の相

関が認められたものは対人恐怖心性尺度の下位尺度のうち、＜自分や他人が気になる悩み＞得点のみであった ($r=.39$)。特に容姿に対する評価懸念では正の相関が認められた ($r=.43$) のに対し、容姿に対する関心集中では相対的に相関が弱くなった。対人恐怖心性の＜自分や他人が気になる悩み＞と、醜形恐怖心性の「容姿に対する評価懸念」は、他者を意識するという側面で一致していることから、相関が強くなったと考えられる。一方で、「容姿に対する関心集中」は、あくまでも自分の容姿に対するこだわりの強さを反映しており他者を意識するという側面は含まれていない。そのため相対的に＜自分や他人が気になる悩み＞との相関は弱くなり、妥当な結果であると考えられる。このことから醜形恐怖心性尺度の併存的妥当性が示されたと考えられる。

総合考察

本研究では醜形恐怖心性を測定する尺度の作成を試みた。具体的には、「容姿に対する評価懸念」と、「容姿に対する関心集中」の2つの下位因子からなる計9項目の醜形恐怖心性尺度を作成した。同尺度は、十分な信頼性、および収束的妥当性、弁別的妥当性、併存的妥当性が確認され、健常者における容姿に対する強いこだわりを測定するための適切な尺度が作成できたと考えられる。

本尺度の特徴は2点挙げられる。第1は、項目数が9項目と少なく、項目内容も平易で理解しやすいという点である。実施が容易であることから対象者への負担が軽く、因果関係的に理論の検討を行ったり、他の質問紙と組み合わせる場合などにも、用いやすくなった。第2は、あくまでも健常者が抱く容姿に対するこだわり（醜形恐怖心性）を測定しているという点である。本尺度を用いることにより、今後は現代青年のさまざまな不適応の要因として挙げられる完全主義や承認欲求との関連を検討し、醜形恐怖心性をもつ人々の心理的メカニズムについて検討していきたい。また、醜形恐怖心性をもつ者と醜形恐怖症をもつ者との間にどのような違いがあるのか、あるいはどのような繋がりがあるのかを検討していく必要もあるだろう。なお、本研究では対象者を女子学生に絞ったが、今後は男子大学生も対象に検討していくことも必要だと考えられる。

引用文献

- American Psychiatric Association 2000 *Quick Reference to the Diagnostic Criteria from DSM-IV-TR*. Washington, DC and London, England: American Psychiatric Association. (アメリカ精神医学会, 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸(監訳) 2003 DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引新訂版 医学書院.)
- Carroll, D. H., Scahill, L., & Phillips, K. A. 2002 Current concepts in body dysmorphic disorder. *Archives of Psychiatric Nursing*, **16**, 72-79.
- 福田一彦・小林重雄 1973 自己評価式抑うつ性尺度の研究 *精神神経学雑誌*, **75**, 673-679.
- 堀井俊章・小川捷之 1996 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報, **20**, 55-65.
- 伊藤裕子 2001 青年期女子の性同一性の発達—自尊心、身体満足度との関連から教育心理学研究, **49**, 458-468.
- Littleton, H. L., Axsom, D., & Pury, C. L. S. 2005 Development of the body image concern inventory. *Behaviour Research and Therapy*, **43**, 229-241.
- McKinley, N. M., & Hyde, J. S. 1996 The objectified body consciousness scale: Development and validation. *Psychology of Women Quarterly*, **20**, 181-215.
- 無藤清子 2000 心理臨床の問題にみられるジェンダーの影響 伊藤裕子(編) ジェンダーの発達心理学 ミネルヴァ書房, pp. 224-251.
- 鍋田恭孝 2004 容姿の美醜に関する病理—醜形恐怖症を中心に— *こころの科学*, **117**, 31-40.
- 鍋田恭孝 2013 摂食障害の最新治療—どのように理解しどのように治療すべきか— 金剛出版.
- 内閣府政策統括官(共生社会政策担当) 2009 第8回世界青年意識調査内閣府, 2009年3月, (<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth8/html/mokuji.html>), (2014年3月31日)
- Phillips, K. A., Menard, W., & Fay, C. 2006 Gender similarities and differences in 200 individuals with body dysmorphic disorder. *Comprehensive Psychiatry*, **47**, 77-87.
- Rhode, D. L. 2010 *THE BEAUTY BIAS—the Injustice of Appearance in Life and Law*. Oxford University Press New York. (ロード, D. L., 栗原 泉(訳) 2012 キレイならいいのか—ビューティ・バイアス— 垂紀書房.)
- 鈴木公啓 2004 日本語短縮版 Padua Inventory (J-PI32) の作成 パーソナリティ研究, **14**, 230-231.
- 田中久美子 2002 被服が身体意識に及ぼす影響—自己対象化に基づいて— 京都大学大学院教育学研究科紀要, **48**, 418-428.
- 田中久美子 2004 青年期女子のダイエット行動に及ぼす友人関係のあり方と容姿に関する身体意識の影響

健康心理学研究, 17, 29-37.
田中勝則・有村達之・田山 淳 2011 日本語版 Body
Image Concern Inventory の作成 心身医学 51, 162-
169.

筒井末春 2003 身体醜形障害 人間総合科学, 6, 139-
150.

(受稿：2013.7.24; 受理：2014.7.28)
